記憶

一之瀬　輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶

【Ｎコード】

Ｎ５１３５Ｃ

【作者名】

一之瀬　輝

【あらすじ】

自衛官だった瀧瀬真はある事件で肉体的・精神的に深手を負い除隊をする。生活をするために上官から斡旋を受けて建設会社へと再就職をするが、「日常」という自衛隊ではありえない生活に困惑しつつも、愛すべきもの、護りたいもの、信じたいものを探し人間的に成長をしていくオフィスライフです

≪第一話≫　出会い（前書き）

はじめまして、一之瀬　輝です。
初投稿で緊張をしております。
長い目で見てやって応援してください。頑張ります！

≪第一話≫　出会い

俺は元海上自衛隊一等海尉、瀧瀬　真。何で'元'かって？

今、俺は営業マンだから……

＞出会い＜

「おはよーミユ」

「おはよー」

「おはよう浅尾君」

「あ、おはようございます」

私は浅尾美雪、２６歳独身。「佐山建設」の本社で営業補佐という仕事をしています。一応ＯＬです。

友達には「ミユ」と呼ばれています

今日は札幌支社から新しい方が来るそうです。

「ね、メグ！今日来る人カッコイイかな？」

大熊幸子、３１歳。

通称「大食いの巨匠」で大食漢で私が勤めている営業１課では関取と言われている悲しい方です。

でも本人が痩せる気が無いらしいのでみんな何も言っていません。

「もし、カッコよかったら恋愛結婚したいなぁ～」

西嶋藍、３０歳。
父が大手ネット財閥「ＪＡＰＡＮ　ＣＯＬＯＲ」の社長であり、
その愛娘。
日本独自の色で海外の情報サービス社の渡り合うという決意の
表しを社名にするほどの天才経営者。わが社、佐山建設の社長と
旧知の仲でありコネ入社。もともと美貌なので受け付け嬢となり
わが社の受付の年齢制限３０歳まで受付嬢をまっとうした人物は
彼女だけである。お見合いがきらいらしく、恋愛結婚願望らしく、
彼氏が欲しいとずっと呟いている。けっこうモテルのに
それに全く気が付いていない。

「キャー！見て！土屋君から水曜日の夜、会えないか？だって！」

中川佳澄、２４歳
営業１課きっての色恋魔。３ヶ月に一回、メールを見て絶叫する
男の
名前が変わっているというほど。まぁ、元から可愛いので男からは
モテルんだけどね……。

「美雪ちゃん、新しく入る人仕事できればいいね」

風見葉子、３７歳。
１課のＯＬを纏める長。もうこの社には２０年近く勤めていて、
３年くらい前に来た新課長の右腕となりこの課を指導する立場
となっている。私のことをすごく信用してくれている人で、
私も同様の信頼を置いています。

「まぁ、ミユのことを馬鹿にしたらぶっ殺してやるわ」

村木恵梨花、２６歳。
私と同期で仕事がバリバリできる私の相棒。
１度恋愛をしてひどい事をされたらしくもう恋愛願望は
無いらしい。酒と仕事を愛すよい友達です。

「おはよ～」

「おはようございますー」

課長だ。課長の挨拶はなんと言うか、覇気が
無いからすぐにわかる。

潮崎武雄、５９歳。
営業１課の課長であり私たちのお爺ちゃんって感じ。
基本的に怒らず語るタイプ。時折、休憩室で東京湾のほうを見て
悲しそうな顔をするのが特徴的。昔は違う仕事をしていたが
能力を買われ、３年前にくらいに違う会社から社長がスッパ抜いた
らしい。

ちなみに札幌支社は本社の次に規模が多く、出世して
本社で働きたいならば、札幌支社を出るのは当然と
されている。出世の登竜門ですね。

「え～前に言ったとおり札幌支社の営業２課から異動してきた
　瀧瀬　真君だ。みんな、仲良くしてあげてくれ。
　よし、滝瀬君入りなさい。」

「はい、失礼しまっ　ゴッ！」

見事にドアの壁に頭をぶつけた。

「馬鹿ね。」

恵梨花の冷たい一言だった。

馬鹿？コレが彼に対する私の第一印象だった……

≪第一話≫　出会い（後書き）

批評・感想を頂けると嬉しいです。

本音

「ご紹介を預かりました札幌支社営業2課から異動をしてきました瀧瀬　真です。今後ともよろしくお願いします。」

「かっこいい！」

「いいわね～」

「イケメンだわ～」

「けっこうよくない？美雪」

恵梨花まで……

「よ～しみんなに自己紹介してもらうか！」

課長の馬鹿でかい声が聞こえる

佳澄と藍さんの期待に満ちた笑みがこちらに向けられた。

日本最大のゼネコン会社、佐山建設営業2課のオフィスにいる。
3年前もがき苦しんでいた俺に手を差し伸べてくれた”上官”の恩に報いるため……

「滝瀬君、みんなから挨拶があるから一歩前へ出てくれ。」

「ハイ」

ようやく終わった。意外と人数が多く大変だった。
特に上林さんと言う人は印象深かった。いきなり俺の手を握り
上林創だ。はじめと読む、趣味はアニメと自分を紹介していた。
この人が自分の上司となるが課長は仕事に関しては問題ないと
耳打ちしてくれた。
嬉しいこともあった。初めて部下を持った。鈴木君と西村君である。
気が弱そうな顔をしているのだがここ一番の”押し”は強いらしい。

「滝瀬君、そこにいるＯＬ君たちからも挨拶があるからいいかね？」

「ここはＯＬからも挨拶をうけるのですか？」

俺のちょくの感想だった。女は黙って男の言う事を聞くもの、
そう思っていた。

「まぁそう硬いことといわずになっ！」

「課長がそういうならば……」

ＯＬが６人やってきた。最初の３人の挨拶は強烈だった。
西嶋さん、中川さん、大熊さん
そして村木さん、風見さん最後に……

「浅尾美雪です、よろしくお願いします。」
細くて長い足、ウエストはキュッとしまっていて胸もそれなりに。
深々と礼をしていた顔を上げるとそこには懐かしい顔がいた。

「恵子っ！」

「え！けんこーこつ？」

「あ、やっキレイな肩甲骨してるなっと思って」

「あ、そうですか有り難う御座います。不思議な方ですね。」

恵子にそっくりだった。笑っているところまで。
ただ抱きしめたかった、愛していると。
でもそれはちがう恵子ではないのだから

「よし、自己紹介も終わったし通常業務にもどるぞ、
今日も張り切っていこう！」

おぉ！と掛け声が聞こえた。

「滝瀬君、早速仕事だが頼めるかい？」

「はい喜んで、課長」

「うむ、我々が設計した建物の寸法が下請け会社で数値を勝手に変えたらしいんだ。それでクレームと同時に新しい寸法値と強度のグラフを作ってもっていって欲しいのだができるか？」

「はい、大丈夫です課長。お任せください。」

「あぁちなみにそこのＯＬさんにグラフの制作を頼めるぞ。ちなみに君の担当は浅尾くんだ。彼女は仕事ができるから頼もしいぞ」

「わかりました課長。これから取り掛かります。」

「浅尾さんこのグラフよろしく」

瀧瀬さんがグラフを渡し早々と立ち去ろうとしていた

「あの、いつまでですか？」

「ならべく早く」

「私は瀧瀬さんの他にも受け持っているので期限を設定
してくれないと出来ません。」

「じゃあならべく早く」

ブチッ

「ふざけないで下さい！私はあなたのものだけでは無いんです！
だいだい期限を決めないで私たちはどうやって仕事をするんで
すか！」

「うるせぇよ」

オフィスの空気が凍りついた

「たかが営業補佐の分際で正社員になめた口聞くんじゃねぇ。
お前は黙って俺の言うことを聞けばいい。何度も言わすな、
期限はならべく早くだ。」

他人の干渉を一切拒否する冷たい声だった。

「最低ね」

恵梨花の声が聞こえた

本音（後書き）

批評・感想をいただけると嬉しいです

出会い

その後も何も無かったかのように過ぎていった。
ただＯＬからの冷たい視線が痛かったがな。
だが勘違いをしていたのならこれでよかったのかもしれない
俺はこういう人間だということをわかってくれたと思う。

終業時間になった。次々と帰っていく。俺は始めての仕事
でもあって残業を選んだが流石にずっとは疲れるから
休憩室で一息つけることにした。

休憩室は中々大きくでかい窓がありそこから東京湾が
一望ができる。

「・・・」

懐からマイルドセブンを出し火をつけ、紫煙を吐き出した

「……うまい」

東京湾が見えるが俺には違う海が見える。

それは……

「相変わらず潮っ気がぬけないな、君にも見えるかね？
　東京湾とは違う海が」

そこには声の主、課長がいた

「3年ぶりか？」

「いえ、正確には3年と186日ぶりです」

「そうか、久しぶりだな元気だったか？」

「お久しぶりです課長、いえ・・・・・・潮崎　海将補」

「久しぶりだな瀧瀬1尉」

ひさしぶりに敬礼をした。課長も昔と変わらず敬礼をしてくれた。
そう彼が俺を救ったくれた”上官”である

「あなたがイージスの艦長だったとき」

「私はあなたの艦の砲雷長だった」

「私が情報機関の長官だったとき」

「君は私の優秀な工作員だった」

「そして今、あなたが課長のとき」

「私は部下でいる」

「あなたのもとで再び働ける事ができてとても嬉しいです」

「私もだ、嬉しいよ」

課長が一つ咳払いをして別の話を話し始めた

「……しかし君が初めてだよ」

「と、いいますと？」

「いや、ＯＬ君の”洗礼”を跳ね除けたのは君が初めてでね」

「そうですか……」

「まっ、彼女たちにも君と同じように誇りがあるわけだから
最大の敬意を持って接してあげなさい」

「ＯＬの誇りですか」

少し自嘲気味に言ってみた。

「そうだ、ＯＬの誇りだ。彼女らがいないと会社が成り立たん。
艦は艦長だけでは成り立たないだろ？副長・砲雷長・航海長
そしてクルー……」

「人一人じゃ社会の歯車は何一つ動かないという事ですね
アイ・サー。以後気をつけます」

「うむ、そうしてくれ」

懐かしいやり取り、俺が俺でいれた最高の場所……海上自衛隊

「しかし、浅尾くんは恵子ちゃんにそっくりだな。俺も
間違いそうになったよ。」

「自分もであります。」

「浅尾くんには間違っても恋に落ちるなよ。浅尾君を狙っている男は多いし、それに・・・まだ来て1日なのに君のことを狙っている……」

「えっ？」

「まぁいい、今の事は気にするな。それよりＯＬ君たちには」

「最大の敬意を表す、ですね？」

「その通り。では後は頼んだぞ～お疲れさん」

敬礼をしようとすると会社ではさすがにだから脱帽敬礼で別れの挨拶をした。

「課長のこと尊敬してるんですね」

まだ身体を９０度下げて深々と脱帽敬礼をしていた俺に声をかけたのは浅尾さんだった

「あぁ、あの方は海自の未来を背負っていかなければいけない方だった」

「カイジ？」

「いや、コッチの話だ」

「そうですか、じゃあコーヒー置いておきますよ」
そういい彼女は休憩室から出て行こうとした
「あ！あの。」
「えっ何ですか？」
「いや、あの、え～とさっきはちょっと言い過ぎた。スマン」
「どうせ課長に言われたんでしょ？」
「え？」
「私待っていますから。瀧瀬さんからゴメンの一言が出るのを」
そう言葉を残し彼女は出て行った
「恵子……」
なぁ、恵子。お前はいったい何のために彼女と出会わせたんだよ
怒ったところまで面影がの残っちまってさ
「はぁ……」
このままじゃお前にそっくりな”恵子”に恋しちゃいそうだよ……
「どうしよう？恵子……」
誰が聞いているわけでもない。ただむなしい俺の声が休憩室に

響き渡っただけだった

出会い（後書き）

三点リーダが多いのが多少気になりますが……
気長に見てやってください（笑

批評・感想を頂けると嬉しいです

意外な一面

俺は今グロック１９を手にしてる。

セーフティートリガーからトリガーへと指をかけた

Ｏｐ．ＦＨ（オペレーション・ファザーハンティング）の状況開始から

２ヶ月の時間を掛けてようやく追い詰めた

このＯｐのターゲットは名前どおり「父親狩り」皮肉にも

そのターゲットとは自分の父である。

そして自分の父に向って俺はこう言った

「死ね」

なぜか俺の親父は笑っていた

俺は躊躇無く引き金を引いた

寝苦しい夜だった。寝汗をびっしょりかいてすぐに寝れたもんじゃなかった

そしてアルコールで強引に寝たらこの悪夢。最悪だ

時計を見るとまだ5時。出勤まで時間がまだあるので一人ドライブを
することにした

愛車のキャディラック（もちろん改造車）にエンジンをかけ近くにある
海に行く事にした

馬鹿でかいエンジン音を出しながら海へと着いた

まだシーズンオフのドライブイン。あらかじめ買っておいた
缶コーヒーの口を空けてのどに流し込む

微糖のせいか苦味と甘味が同時に襲ってくる。瀧瀬はブラック好み
だが、売り切れだったため渋々買ってきたが口に合わない

お決まりの煙草に火をつけて紫煙を吐き出す

海を眺めてみた。ただ何も無く決まった間隔で波がうねっている

このでかい海に身を預けれたらなといつも思う
砂浜にでかい図体を大の字にして身を瞑った
まだ5月。肌寒い風が瀧瀬を包んだ

「……7時半」
時計を見るとそうなっていた
「遅刻……まずい！」
始業時間が8時５０分。車で飛ばせば1時間と少し
「間に合う」
瀧瀬はひたすら車を飛ばした

「ねぇ、美雪。あんたそんな事言って瀧瀬さんと仕事できるの？」

「う～ん。瀧瀬さん次第じゃない？」

「質問を疑問で返すな！」

ヴァン　ヴァン　ヴァン　ヴァン

「うるさい、朝から暴走族？しかもこんな都会で」

恵梨花の毒舌が炸裂した

「でも何か音が近づいているような気がするんだけど……」

私が言うと恵梨花は青ざめた顔で言った

「ねぇ、アレじゃない！？」

「え……？」

私も振り向くと真っ赤な色をした如何にも高級外車っぽい車がこちらに向っていた

「うわぁキャデだ」

恵梨花が唸るように言った

「きゃで？知ってるの？」

「うん、アメ車の超高級車に部類するわ、しかも改造車としても扱い易さナンバーワンね」

「博識だね」

「お金と車にしか目が無いの」

普通に言ってのける恵梨花だった

「でも乗ってる人かっこいいよね。誰だろう？」

その車はコッチに向ってくる

「もしかして……うちの会社の人？」

「可能性は高いわね。でも誰だろう？そんな人いたっけ？」

車は私たちの前に止まり、車から出てきた

「……瀧瀬……さん？」

「へっ？」

車から出てきた主はそう、瀧瀬さんだった

「えーっ！！」

私と恵梨花のの声がミックスされ大音量となった

「そんなに驚かなくてもいいんじゃないかい？」

「瀧瀬さん……なんかセクシーですね」

「えっ？」

「スーツなのにシャツ出ししてるし、ボタンも第三まで空いているし

少し腰パン気味だし、何か変なネックレスしているし

煙草くわえているから」

恵梨花はこの瀧瀬さんの姿を携帯で撮った

「ちょっと何してんの？」

私が小声でささやくとこう恵梨花がいった

「入社わずか二日でファンクラブができたのよ

希少価値高いしこの写真……金になるわ」

恐ろしい女め恵梨花……

「あの君たち遅れるよ」

警備員が私たちに声を掛けてくれた

「え？瀧瀬さんは？」

「あぁ、とっくに行っちゃったよ」

「恵梨花、急ごう！送れちゃうよ」

「そうだね、行こうか！」

案の定瀧瀬さんの写真は馬鹿売れしたらしい

瀧瀬さんの意外な面が見れた今日の朝だった……

意外な一面（後書き）

批評・感想を頂けると嬉しいです

衝突

正直誤算だった

まさか同じ課の人に見られるとは

まぁ、いいこれは仕方ない

それより浅尾さんに頼んだ書類はどうなったのやら……

時間は十二時になりお昼のチャイムがなった

いつものように休憩室で煙草を吸い、コーヒーを飲む

海上自衛隊の仕事柄、飯の時間が大幅にずれる事が多いためか

あまり昼飯を食べる習慣が無くなった

自販機で煙草を買い火を点ける

「……あれ？」

ジッポーで火を点けようよすると火が点かない

すると何処からか火が自分の前へ点いた。それは村木さんだった

「あれ？村木さんって煙草吸うの？」

「ＯＬですから何でも持っていないと」

「そうか、有り難う」

そう言い俺は煙草を火の近くに着け、軽く吸う

煙草の先は一瞬赤くなりそれから先が黒くなった。火がついた

思いっきり肺に吸い込み口から紫煙を吐く

「……うまい」

「ホントに煙草好きなんですね」

「え？」

「いや、瀧瀬さんって煙草吸うときは至福のときって顔するから」

「え、本当？」

「まぁ、いいわ。それよりあんたミユの事どう思ってるのよ？」

「ミユ？」

「美雪よ美雪」

「どう思ってるって？普通だよ」

「ふ～ん、そ」

そういい村木さんは何処かへ行ってしまった

俺は短くなった煙草を見て鼻で笑いもう一回吸ってから捨てた

昼の終わりのチャイムがなって再び仕事についた

「瀧瀬さん」

「ん？」

振り向くと浅尾さんがいて右手には頼んでおいた資料があった

「これ、終わったんで渡します」

俺はそれを無言で受け取り席を立とうとすると

「待ってください！」

振り向くとすごい剣幕をした浅尾さんがいた

「本当に言う事が無いんですか？」

「特に無いが？」

「あの、瀧瀬さん”お礼の言葉”て知りませんか？」

「知らない」

「いい加減にして下さい！」

彼女が思いっきり腕を机にたたいた

「人をなんだと思ってるんですか！？」

「あぁ」

意識がボォーとする。体がフワフワ浮いて何処にでも行けそうな気がする、意識が飛びそうだ

俺の眼の前には愛しい恵子がいる

「恵子……」

俺は恵子に抱きつくように倒れた

海将補が青ざめた顔で俺を呼んでいた様な気がした

「……何処だここ？」

「あぁ、瀧瀬ようやく目覚めたか」

「海将補じゃなくて課長どうしたんですか俺？」

「まったく君は倒れたんだよ」

「え？」

どうやら俺は倒れたらしい。原因は極度の睡眠不足と疲労らしい

最近寝れた無い原因……

「恵子ちゃんじゃないのか？」

「ーーーっ！」

「墓参りにいったらどうだ？」

「しかし……」

「社長にはもう言ってある、行って来い”上官”命令だ」

「わかりました……」

「まぁ、今日はゆっくりしてなさい」

課長はそういい病室のドアを開け、出て行った

点滴のせいか眠くなりしばらくベットに身を預ける事にした……

衝突（後書き）

批評・感想を頂けると嬉しいです

墓参り

雨が降っていた。土砂降りの雨、、今年一番の雨だった

昨日病院から退院し、恵子の墓参りをする事にした

恵子が好きだった百合の花を持っていき墓の前に置いた

「・・・・・・」

横から突風が吹き、持ってきた百合の花が散華するように散った

なぁ恵子、お前は一体何を怒っているんだ？

……わかった、わかるまでお前のそばにいるよ

煙草に火をつけて吸おうとするが火がつかない

あと少しで点きそうなんだが突風で点かない

そういえば恵子は俺が煙草を吸うのをよく怒ってたな

もしかしてこれもそうなのか？

しょうがないから墓の階段に腰をかけることにした

スーツはビショビショになり立たせた髪もペッタリ下を向いた

雨はかなりの間降った。俺もかなりの間墓にいた
時計を見ると午後三時。実に六時間もいる事になる
もう帰ることにした
結局何もわからぬまま……
家に着き軽くシャワーを浴び、また強引にアルコールで寝た
深い夜は永久に続くような深さだった……

今日は会社へと再び出勤しなければならない
墓参りをして一つ気がついたことがあった
素の”俺”を出す事だった。もう仮面を繕い自分に素直じゃない事を

する事は疲れた。

香水をつけて、ネクタイを外す。そして俺は愛車のキャディラックに

キーを入れエンジンを点ける

好きなＣＤをかけて煙草を吸う。これでいいんだ……

会社の前に着き、警備員に事情を告げ駐車場に留めれるようにした

エレベーターに乗り営業２課のオフィスに着いた

「……おはようございます」

課長に挨拶をし、課長はこう口を開いた

「行ってよかったか？」

俺は今ならこう言える

「よかったです」

「そうか、では仕事に励め」

「ハッ！」

つい昔の癖が出てしまった。周りの人たちが怪訝な表情を見せたがなんとか繕った。

午前はひたすらクレームの時言うセリフを考えていた

「おい！」

誰かに声をかけられて意識を現実に戻す

「上林さん」

「もう昼だぞ食いに行けよ」

時計を見ると十二時十分

気分転換のためいつもとは違う屋上に行ってみた

「……しまった」

屋上はＯＬの昼食スポットであったのだ

どっかから寄ってきたＯＬが

「いっしょにお昼しませんか？」

と誘ってきたが繰るく跳ね除けた

屋上の一番奥に行き煙草に火をつけた

いやな記憶が思い出される……

墓参り（後書き）

自分に文才が無いせいか伝えたい事がイマイチ伝わりませんでした（笑

批評・感想を頂けると嬉しいです

回想（前書き）

スイマセン、ちょっと短めです

回想

「お前は何も護れない」

沈み逝く艦が響き出す不穏協和から聞こえた唯一の声だった

「貴様に何が解かる」

実の父、瀧瀬進にを銃口を向けている

「グロック17か……お前も”組織”の一員か？瀧瀬一等海尉。
いや、海上自衛隊特務情報局、ＳＩＭ（特殊陸戦隊）隊長さん？」

「日本共民党党首，瀧瀬進。対テロ防衛法に則り貴様を逮捕する」

俺は威圧するように言ったが通用しない。これが俺の親父だ

「俺は捕まらない。それだけだ」

「対テロ防衛法第一条2項、コノ法律ニ従ワナケレバ射殺ヲ認可ス
これにより俺は貴様を射殺しなければならない」

ちなみにこの2項は国民に公になる事は無い

「瀧瀬真…俺の子に生まれ、防衛大学校を主席で卒業。砲雷への
道に進みやがて超弩級イージス艦”しまぐに”の砲雷長となるが
極東事変により海自から身を引かざるおえなくなったが、
海自初の極秘情報機関、海上自衛隊特務情報局の局員として

潮崎一佐の敏腕工作員となるか……波乱万丈だな」

「だまれ」

俺は引き金を引いた、警告発砲である

「俺はT機関の機関長として貴様を追いかけてきた」

心理戦、自分の情報をどれだけ持ち合わせているかを見極める
ために使う話術。一度折れたように見せかけて相手の本音
を引き出す一種の”戦闘”

「T機関いや、瀧瀬機関、海上自衛隊特務情報局の史上最高の
情報・戦闘機関だよな？」

「それで？」

どうやら上手くいっているようだ

「ＭＤＩＣ（海上自衛隊特務情報局）と呼んでいいかな？」

「何故その名称を知っている？」

「さぁな……？」

俺が手玉に取られているような気がする

「ＭＤＩＣが何故俺の命を狙う？」

「これは国家の”意志”だ。逆らう事は出来ない」

「意志って誰だ？本当に国家なのか？まさか吉岡官房長官の意志では無いよな？」

「吉岡官房の策謀ではない、あくまで国家の意思だ」

「では他に誰がいる？私を疎んじる奴は吉岡しかいない様な気がするが？」

「我がＭＤＩＣ司令、潮崎海将補からの命令で事が重大になる前に始末しろと」

「ふむ……」

一体何分経っただろうか、ターゲットは全く喋らない

「喉元に刃を当てないとこの国は解からないのかな？」

「何？」

「どうやらこの国の”状況”はそこまで緊迫しているようだな」

「極東事変が起こりまだ日本は目覚めないのか？答えてみろ真」

初めて名前を言われたような気がする

「危機的感情が薄い、これは島国……海洋国家の傾向だと」

「礎……」

「礎？」

「そう、私はこの国のためにたくさんの静粛をしてきた。

だが目覚めたのがお前だけ。悲しい事よ」

「静粛？」

「真、俺と手を結ばんか？この国のために、この国を目覚めさせて

真の独立国家としてアメリカのしがらみから抜け出した真の国に」

回想（後書き）

ＭＤＩＣでは新規の小説で詳しく述べたいと思います

批評・感想を頂けると嬉しいです

回想（前書き）

学校が始まったので更新が遅れました

スイマセン

回想

２００４年、極東の情勢は緊急のものであった……

中国共産党、穐論明国家主席の発言が波紋を呼んだ

「沖縄は我国の属国であった、なぜ私達が保護してきた国を
手放さなければならない？まぁ”今”の日本国には責任は無いが
だが、中国政府は改めて沖縄返還を日本国政府に要求する」

日本経済は大パニック。株価は下がり、一時的に日本経済が
麻痺するにまでいたった

中国側による経済的混乱を見込んでの発言か？との憶測も
あったが、沖縄周辺に中国空軍機の領空侵犯の数が異常に増え
危機感を感じた佐島首相は海上自衛隊に対し初の海上警備行動
を発令、航空自衛隊には各方面２４時間スクランブルを命令した

また強く中国政府が反発、中国側も日本の領海ギリギリに海軍を
配置するなど一触触発となった

米国防省（ペンタゴン）は本件には一切関与しないと発言。これで
日本と中国の全面戦争とういう最悪のシナリオが用意された

佐島首相は全面戦争を打開すべく平和的交渉に乗り出すが失敗

これにより首相は最新鋭超弩級イージス艦「しまぐに」を主として

第一海上防衛艦隊を編成、「しまぐに」・「こんごう」・「はるな」

「みょうこう」・「あたご」　潜水艦は「おやしお」・「うずしお」

による海自最強であり司令は大垣海将補、注目の高い「しまぐに」

艦長は潮崎1佐であった

動き出したアジアの虎、中国であった……

「艦長、攻撃許可はまだですか？」

「まぁ焦るな瀧瀬、まだ時間がある、平和的解決もあるではないか」

「しかし…艦隊司令が後方にいるとは解せませんね」

超弩級イージス「しまぐに」の、ＣＩＣ（コンバット・インフォメーション・センター）にいる

「まぁ、そんなもんだろ」

呑気な会話が前線で起きてきるということが自分的には許せない

それを許容している自分もいる。艦長が小指を立てて聞いてくる

「そいえば恵子チャンとはうまくイッテイルノカイ？」

周りから笑い声が聞こえる

「う、うるさい！貴様ら是が終わったら修正だ！」

「砲雷長あんたいつの時代だ？ここは海自だぞ海軍ではないぞ？」

副長までいじめてくる……

斎藤一曹が声を突然出した

「艦長、右舷前方から未確認水中雑音……高速接近！！」

「なんだ？」

「現在確認中……」

空気が引き締まった。誰かの生唾を飲む声が聞こえた

「…！！感４右舷前方２０。より魚雷４接近感知！！雷速４７ノット

距離四千三百きりました！！」

「！！魚雷……？」

「突っ立っていないで急げ！！訓練どおりかわしてみろ！！」

副長の一喝で行動開始

「全艦に打電！対空・艦・潜戦闘用意！」

艦長の号令

「機関始動！両弦全速取り舵いっぱい！」

「機関始動！両弦全速取り舵いっぱい急げー！」

副長の復誦が聞こえて次々と復誦されていく

艦が少しずつ曲がり始めた

「魚雷、距離２０００切りました！」

「まだだ、まだ早い。両弦全速、取り舵そのまま」

「了解！両弦全速、取り舵そのまま！」

「艦長！魚雷１５００切りました！」
「よしっ！今だ面舵いっぱい！」
「転舵急げー！」
「距離５００！」
「かわせー！！」
誰かが悲鳴をあげる
「被弾まで５秒！」
５・４・３・２・１……
機械が出す熱音が聞こえた
「こちら航海長、敵魚雷全て回避！！」
歓声が聞こえた……抱き合うもの、叫ぶもの多種多様であった

「よしっ！針路変針２－３－５取り舵一杯！」

「針路変針２－３－５！取り舵一杯ヨーソロー！」

しかし攻撃のできない海上自衛隊にはさらなる試練が待っていた

回想（後書き）

批評・感想を頂けると嬉しいです

回想

「本日未明１時４分、中国海軍は海上自衛隊に対し、魚雷による攻撃を受け戦闘状態へ入りましたが、無事回避。現在戦闘は小康状態に入っています……」

アイドルなのかアイドルじゃないのかよく解からないアナウンサーの棒読みから始まり、戦争ジャーナリストに話を振る

「これは間違いなく戦争です。是が戦闘なのです！」

果てのないいつものお決まりの言葉で締めくくるジャーナリスト

ブラウン管から映し出される映像に冷めた態度でいる自分がいた

無意味にコーヒーを啜り、もう二日も寝ていない自分を叱咤する

外交オンチと陰口を叩かれながらもアジア平和のため全てを捧げてきたものが音も無く崩れ落ちた

「総理、中島外相から連絡がありました、交渉決裂です。魯国家主席は沖縄返還とともに軍を引くと言っています」

秘書からの一言にまたも絶望は広がる

「万が一攻撃が命中した場合、自衛権は行使しますか？」

「……むりだな。我国は憲法9条に縛られてる。まして、前例が無い事件だ…皆対応に困っている」

「では見殺しにしろと？」

「そうではない。私的にはすぐに攻撃を仕掛けて、殲滅して貰いたい
ものだがな」

「だが私達は何も出来ないんだよ、歯痒いばかりだ」

「だがいずれ煉獄の扉は開けなければならない」

「煉獄の扉？」

「いずれわかるよ……」

佐島は何も出来ない自分に無力を噛締めていた……

「・・・・・・・」

戦闘が終わり7時間。全員の疲労が限界に近づいていた

初めての実践、それに伴う緊張。戦闘が終わり張り詰めていた緊張の糸が切れ疲労がどっと押し寄せてきたのだろう

「斎藤1曹、レーダーに感は？」

「対空・艦・潜いずれも感無し」

艦長が一定感覚で聞いているが全くといっていいほど無にも無い

艦長までが欠伸を噛締めている

ヘリーのローター音がうるさい。中国の哨戒ヘリが上を通過している

反撃命令があるわけでも無くうっとしい音を聞いていなければならない

「航海長よりＣＩＣへ敵艦の動きが活発していますどう対処しますか？」

「ＣＩＣより航海長へそのまま待機、以上（オーヴァー）」

「航海長よりＣＩＣへアイ・サー」

また重い空気が流れた。何もしてくれない政府に怒りと絶望を覚えた

「レーダーに感1、こちらに向ってきます。……我が艦隊です」

「何故今向ってくる?おい、艦長に繋いでくれ」

いつの間にか艦橋にいってしまった艦長を再び呼ぶ

「瀧瀬砲雷長、こちらに向ってくる艦から打電がありました」

「読み上げてみろ」

「１６：５２より打電”我、補給艦マシュウナリ。貴艦ノ補給ヲ致ス
許可ヲ求ム”とのことですいかがしますか？」

「ご苦労だ」

「はっ！」

通信員は敬礼をして持ち場に戻っていった

「ＣＩＣより艦橋（ブリッチ）へ艦長、補給艦が来ましたいかがします？」

「今はしなくてよいデフコン５をこのまま維持しろ」

「アイ・サー。通信員、補給艦へ打電”中国艦ノ動キガ不審ナリ
今シバラク待テ”と打て」

「砲雷長、ヘリがこちらに向っています」

こんな時にヘリとは1つしかない…敵艦観測ようは攻撃するための距離と座標を把握するのだろう。中国にはイージスもなく更に攻撃が無いのを知っているからヘリを飛ばしてきたのだろう

「両弦全速、針路1－1－5面舵一杯」

艦長の声が聞こえた。いつのまにか艦橋(ブリッチ)からＣＩＣに降りてきてた

「アイ・サー！両弦全速取り舵一杯！」

復誦が聞こえて徐々に艦が動き始めた

「！？敵観測ヘリ本艦を通過(フライ・パス)！…補給艦(ましゅう)に向っています！」

「観測ヘリが？はっ、ましゅうが危ない！打電”スグニ戦闘カラ離脱セヨ！」

「無駄ですぜ艦長……」

「何がだ？斎藤？」

「中国からハープーン（対艦火器）発射を確認。アクティブレーダー反射を
ましゅうに確認。弾着まであと４分５３秒」

海上自衛隊に始めての危機が訪れた……

回想（前書き）

更新が遅れて申し訳御座いません

回想

「艦長！スタンダード（対空ミサイル）発射許可を！！」

「ダメだ、上からの許可は降りていない」

「では艦長は”ましゅう”を見殺しに？」

着弾まで残り４分１１秒、残された時間はもう無い

「航海長よりＣＩＣへ、何やってんだ！はやく追撃を！！」

「ＣＩＣから航海長へ、追撃は許可されていません」

「くそっ！……」

航海長も苦渋を飲んでいるのだろう

「艦長！上に任せてはいけません、現場でしか解からないことです
さぁ、はやく発射許可を！！」

「瀧瀬……」

艦長も明らかに混乱している

艦長はフゥと息を吐き、コンソールに息を吹きかけた

「艦長より乗員諸君へ心から聞いて欲しい。現在我が海上自衛隊は創設以来最大の危機を迎えている。我々はあくまで上層部の指示を従おうと思う……」

まさか……見殺しに？

「艦長！あなたは間違っている、あなたが目指していたフリート・イン・ビーイング（戦わざる海軍存在する事に意味がある）の集大成がこれなら憲法を無意味に盾としている哀れな負け犬でしかない！」

「着弾まで３０秒！！」

「艦長！発射許可を！！」

艦長は黙ってこちらを見ている。おそらく艦長の思考回路が壊れたの
だろう。虚ろな目でこちらを見ている。こうなればダメだ今の艦長に
判断をする力は無い

状況を打開するために、俺は上を見て深く息を吸い込み号令をかけた

「対空戦闘用意！」

「方位２０度、仰角７０度。飛来するハープーンに備え」

「スタンダード（対空火器）用意」

「アイ・サー！後部ＶＬＳハッチ稼動よし（オールグリーン）」

斎藤が稼動状況を確認して声を発した。斎藤は本当によい軍人だ
この状況で訓練どおりにできる奴はそうそういない

「いいか、必ず落せ！！」

激しくコンソールに声を吹き込む

「着弾まで２１秒！！」

これが海上自衛隊初の反撃となる

「撃ち方！よーい」

大きく息を吸い込んだ、むせるぐらいに。じゃないと攻撃という重圧
から逃げたくなるからだ

「撃てーっ！！」

「ならん！！」

それは艦長の声だった。さっきまでの虚ろな瞳ではなく強固な意志を
もった瞳をしていた

「撃ってはならん。撃ってはならんのだよ」

「し、しかし艦長！このままでは”ましゅう”の乗員の命が…」

今まで黙っていた先任海曹までが口を開いた

「ちゃ、着弾まで5秒……」

5秒、誰もが今悟った

終わりだ……

ドンッ！！

天地がひっくり返るような音だった

艦長が俺の手から落ちたコンソールを拾い、声を出した

「被害を確認する。試験段階中だが使わない手は無い。ＬＩＮＫ１４起動！
衛星からの映像をすべて”ましゅう”にフォーカス（集中）！」

大きなディスプレイに徐々に被弾した”ましゅう”の映像が出てくる

”ましゅう”は左舷側に大きく傾いており、乗員が退艦するために海へとダイブしている

「ハープーン2発をく喰らって無事なわけが無いか……」

日本の領海内…いや、海上自衛隊に初の戦死者が出た

1人2人という数では無く、５０人以上の死傷者はいるだろう

誰もがそのことを受け入れ、ほとんどの乗員（クルー）が涙を流している

「う……ぐっ！……」

泣いているのは先任海曹だ、大柄だが無骨で優しい先任海曹のことだ

訓練でよく会う補給艦の乗員の死を受け入れれなかったのだろう

「後方艦に打電、負傷者ヲ救助セヨ」

艦長の声は至って変わりが無く、冷静な顔だった

「艦長！！」

何故か許せなかった。部下に誰よりも優しかった艦長、

何故、見捨てるような真似を……

回想（後書き）

批評・感想を頂けると嬉しいです

回想

「くそっ！！」

先任海曹が壁をおもいっきり殴った

その拳には血が流れており、殴った拳を先任海曹はただ見つめていた

ＣＩＣは沈黙した。機会熱だけがうるさく聞こえる

「こ、こ、航げ海長よりＣＩＣへ水中から発炎を１確認！距離８０００！！」

「斎藤！レーダーに感は？」

艦長がまさかというような顔をして斎藤に聞いた

「現在確認中……」

斎藤はレーダの周波数を上げたり下げたり偵察衛星からの情報を集めている

艦橋（ブリッチ）にいる航海科の科員たちも双眼鏡を使い情報の収集をしている

「おかしい……艦長、レーダーに感、ありません」

「そんなことがあるわけ無いだろう、フェーズト・アレイ・レーダーに

映らない事なんかあるわけ……」

艦長も明らかに動揺している。艦長だけではなく、全員に言えることだった

「艦長、ヘリを出しましょう。そうすればおのずとわかるはずです」

艦長も納得した表情でよしと口を開こうとしたときだった

「キャノピテーションノイズ（水中推進音）確認。あ、注水音です
これは……中国海軍原子力潜水艦”漢”級です」

「”漢”だろう、捕捉できなかったのか？」

艦長が怪訝な顔で問い出した。何故なら”漢”級潜水艦の排水音はうるさく、黄海を走っているのに佐世保基地のソナーに

引っかかるというありえない潜水艦なのだ

「”ましゅう”の圧壊沈没音でソナーの効率が一時的に落ちたので

恐らくそのときでは……」

俺は少し考えてみた

発射元が割り出せない、水中からの発炎、敵原子力潜水艦……

「サブロック！？」

ほとんど全員が同タイミングで声を出した

斎藤が声を出した

「レーダーに感1！ホップアップで漸く捕捉出来ました、潜水艦からの
攻撃を確認、ハープーン1基」

「何故だ？」

「！？」

斎藤の目が勢いよく開かれそして絶望したかのように天を仰いだ

「ま、まさか”ましゅう”にとどめを？」

斎藤は首を横に振り、声を出した

「目標は……本艦です。アクティブレーダーが本艦に反射を確認。
敵ミサイル巡航速度８００ｋｍ
相対距離２０００、衝突時間２分３０秒」

「艦長、どうしますか？」

艦長は下を向いたまま口を開こうとはしない

「艦長！！」

「敵ミサイル最終突入体勢に入りました！着弾まで３０秒！！」

「艦長！指示を！！」

艦長はこっちを向いて口を開いた

「……総員衝撃体制用意……」

斎藤が声を発した

「艦長！このままでは衝突コースは艦橋です、主に第二甲板です」

「操舵員以外は退避、繰り返す、総員衝突用意……」

「艦長これでは我が艦にも死傷者が出てしまいます」

これではクルーの命が危ない。艦長は何を考えているのか

ゴオッッ

近づくミサイルの音、間違いなく自分の心拍数が上がっている

なぜなら今は見ている側ではなく受ける側であるからである

迫り来る恐怖に俺は初めて死の恐怖を感じた

「斎藤、反撃……」

「ダメです砲雷長。スタンダード（対空火器）の有効射程は切りました」

「航海長よりＣＩＣへ、衝突まで時間が無い、早く反撃を」

「艦長……」

「くっ、ＣＩＷＳ（近接戦闘火器）用意、これはあくまで最低限の防衛手段である」

「艦長、いいですね？」

艦長はこれには了承したようで顔を上下に振った

「よし、ＣＩＷＳ（コントロール・オープン）自動追撃開始オープーンファイアー（撃ち方始め）！！」

「アイサー、攻撃開始」

２０ｍバルカンが火を噴き、敵ミサイルへと攻撃を開始する

「着弾まで３００メートル！」

「総員衝撃体勢をとれ！！」

その後はあまりよく覚えていない。どうやらミサイルは残り２００ｍで
撃墜したらしいが、破片が艦を襲った

俺は辛うじて意識を保っていて周りを見た

艦長は意識は保っているようだが頭から血を流している。副長は完全に意識を失っており、この中で最高将校である俺はやるべき事を
やった

「ダメージコントロール！艦内各部の損傷を報告せよ」

「はっ、左舷対空レーダー故障。それ以外は全て正常に稼動しています
しかし、第二甲板は火の海です。極度の混乱により正確な被害集計は
不可能です。現在消火班が第二甲板に急行しています」

「了解」

推進・操舵系にダメージは無い、艦はまだ生きている。

俺は艦長に駆け寄り声をかける

「艦長、身体は大丈夫ですか？」

「大丈夫だ。それより乗員は…？」

「第二甲板は火の海のようです。操舵員は全員戦死しました。現在代員を急行させています」

「そうか、クルーに死者がでたか……」

そのときＣＩＣの外からタドタドタと足音が聞こえた

「何処の馬鹿だ！戦闘中に無許可で動いているのは！！」

俺がそう叫ぶのと同時にＣＩＣの扉が開き、そこには数人の人間に辛うじて持たれかかっている人がいた

それは血まみれになっていた航海長であった

「航海長！！」

回想（後書き）

批評・感想を頂けると嬉しいです

回想　～転機～

「航海長！！」

「う、ぐぅ……」

航海長を吐き、ぐったりと倒れた

「馬鹿野郎！なんで連れてきた！！」

俺が航海長を連れてきた航海科の科員を怒鳴ると一人が声を出した

「申し訳ありません砲雷長、航海長がどうしてもと…」

航海長は血を吐いているだけではなく、ミサイルの破片を無数に身体に
受けていた

「なんで……」

航海長は苦しそうにこっちを見て何かを伝えようとしている

「くそっ！医療班、衛生兵を連れて来い！！」

俺が怒号すると慌てて航海科の科員が医療班を呼びに行った

「航海長、しっかりして下さい」

俺は航海長の元へ駆け寄り声をかけた

「瀧瀬……」

必死に声を出して”砲雷長”としてでは無く、”瀧瀬真”ととい
う個人に
語りかけている

「俺らは…海上自衛隊として・・戦ってきた・・だが・・ぐっ！」

「しっかりして下さい！航海長！！」

「煉獄・・の・・・・扉・・は……開いたぞ・・・・」

航海長は本当に苦しそうに喋っていて俺も苦しくて涙が出てきた

深く息を吸い込み最後の力を絞ったように声を張り上げた

「憲法に縛られるな、クルーから死者が出たという現実から逃げるな！」

「現実……」

「……ぐふっ！！くっ……」

「航海長！！」

医療班がようやく到着して応急処置を始め、脈を計り始めた

「砲雷長、医療室に運ぶ猶予はありません。脈が相当弱ってます」

衛生班班長、加藤1尉が喋りかけてきた

「そうか……助かるのか？」

加藤1尉は顔を少し顰めて答えた

「……覚悟しておいてください……」

そんな……

「そうか、最善を尽くせ」

「はっ！おい、血清アルプミン投与！！」

眼の前が真っ白になりそうだった。航海長が……

ふと横をみると顔が真っ青になった艦長が突っ立っていた

「艦長……」

「私は……私は……」

眼の前にある現実に呆然としたのか混乱をしている

「瀧瀬、私はどうしたらいいのか？どうすればいい？……」

うろたえた目をしてこちらに向ってきた

俺は艦長の顔を目掛けてぶん殴った

「馬鹿野郎！！あんたの優柔不断で航海長が死のうとしている、
まだあんたにやることは残っているだろが！！」

息を吸い込み喋る

「艦長という仕事が……」

「瀧瀬……」

「急速に脈拍が低下しています！！それに出血が酷いです！！」

加藤はすごい形相で一喝した

「くっ！酸素の流入量を上げろ！血液を持って来い！！」

航海長の容態が急変したようだ

俺は慌てて航海長に駆け寄り声をかけた

「航海長？航海長！！しっかりしてください！俺が見えますか？」

「う……くっ！！……くそっ！！」

「航海長！！」

加藤が声を慌ててかけて心臓マッサージをしようとしたが傷が酷くて

触れないようだ

「瀧瀬……クルーを頼む……」

「頼むじゃないんです！これからもあなたは”しまぐに”の航海長の

責任を全うしてもらわなければいけないのです！！」

「いいか瀧瀬…今ある眼の前の現実を考え”行動”をしろ……」

「そんな、困りますよ1人だけ逝かないでくださいよ！！」

「うっ！……これが最後だ、舞に愛していると言っておいてくれ……」

「え…」

「航海長の奥さんって他界してるんじゃ……」

航海科の誰かが発した声だった

「黙れ！！」

そうだ、確かに航海長の奥さん、舞さんは病気で他界している

だが、今となっては関係ない。最後の”望み”なのだから…

「わかりました、舞さんに言っておきます！絶対に約束をします！！」

航海長はニッと笑い

「バカ、舞は死んでるよ……」

ガクッ

「航海長！しっかり！気を確かに！！」

２００４年６月１４日、海上自衛隊ＤＤＨ護衛艦「しまぐに」

航海長、西原克己は永遠に旅立った
その顔はとても穏やかで笑っていた……

「くそっ！！」

加藤はたった今届いた血液を握って床に投げた

嗚咽

涙が溢れた

誰よりも人望が厚く、誰よりも優しかった航海長……

航海長が最後に残してくれた”言葉”に俺は従おうと思う

航海長のせいにはしない

是はあくまで俺の”意志”だ

「戦場の最前線で静観は美徳ではないな」

俺は艦長に向って喋ると、艦長は「へっ？」って顔をした

「艦長、現在戦闘海域にいる全ての敵を殲滅する事を具申します」

「それがどういうことか解かっているのか瀧瀬？」

「ええ、解かっていますよ。俺は自分の意志で口を開きました」

俺はこう解釈した。誰のためでもない、自分の幸せを掴む為に
大切なものを護る。それが海の守護者、海上自衛隊に与えられた使命
なのだと……

「もう憲法の大義名分は飽きたんだ！戦争をしない、武器は持ちません
と言って攻めてこない国は無いんですよ」

「瀧瀬……貴様……」

こう宣言した

「解かったんですよ……憲法に護られた平和は続かないということが
航海長が死んで……」

「……了承した。だが、俺は生憎この身体だ。艦の指揮もとれない
それにこの後の事後処理の……」

艦長の身体はボロボロだ。額からも血を出し、意識も朦朧としている

何度でも宣言する。俺の”意志”だ誰にも迷惑なんかかけはしない

「艦長、ご安心ください。全責任は砲雷長、瀧瀬真が預ります」

艦長はにこやかに笑い

「そうか、安心したよ。後は頼んだ……」

そう言いガクッと倒れた

「加藤、艦長を頼んだ」

加藤を見て命令をすると加藤は目で了解の意を表してそのまま艦長を

担いでいった

副長は意識を当の前に失っており、現在俺は最高級将校となった

クルーを見ると全てのクルーが涙を流し俺の指示を待っている

「いいんだな俺が指揮をとっても？」

俺はそう問い掛けると全員がハッ！！っとでかい声を出してくれた

中国、お前らはこれから復讐の鎮魂歌にどっぷり漬からせてやる

！！

回想　～転機～（後書き）

ちなみにＤＤＨとは、ＨＤＤ（ヘリコプター）（駆逐）
という意味です。
現在の艦は対潜哨戒に重点を置いています

批評・感想を頂けると嬉しいです

回想（前書き）

これで回想は終わりです

回想

～～～ＤＤＨ護衛艦はるな～～～

”しまぐに”は被弾した、俺は”はるな”の艦長。だが何もできなかった

俺は巨大なディスプレイに映っている”しまぐに”を呆然と見ている

ドタドタと走ってくる音が聞こえた。息を堰切って走ってきた

通信員だ

「通信員、どうした？」

通信員は慌てて読み上げた

「し、し”しまぐに”から打電です」

「どうした？救援要請か？」

”しまぐに”も限界がきたか……恐らく機関室の冠水か推進系統のダメージか？

「”しまぐに”はよく頑張ったよ・・・」

隣にいる副長が涙ぐんで喋っていた

「い、いえ……救援要請じゃありません」

「なんだ？他に何がある？」

この状況で打電、艦長は潮崎1佐。独断専行は無いはずだ……

「読み上げます」

通信員は手を震わせながら読み上げた

「我思うに現在の戦局は如何わしいものなり。戦局の逆転を図るために

突入攻撃を仕掛ける。他の全艦は手を出さないよう」

戦局の逆転を図るために突入攻撃……

「発信者は誰だ？」

俺が怒鳴ると通信員は萎縮しながら答えた

「宛　海上自衛隊」

「そんなの当たり前だ。いいから続けろ！！」

通信員が目を大きく開いた

「発　海上自衛隊”しまぐに”　砲雷長　瀧瀬真」

「砲雷長！？」

瀧瀬真……海上自衛隊史上天才の砲雷科員。幕僚指揮過程を難なく通過した男

「ここで大局を見誤ったか……」

俺には出来ない。おれも今すぐ反撃したいが面子をこだわって出来なかった。彼が羨ましい、自分の意志を行動で表せる人が羨ましい

「艦長！”しまぐに”から発煙2確認！！方向は敵艦隊です」

「なっ！攻撃！？」

”しまぐに”が動いた……

～しまぐに～

「弾着まで5秒……」

「弾着！！攻撃成功です！！」

うわぁ！！っと歓声が上がった。海上自衛隊初の攻撃は呆気ないもの

ボタン一つで人が死ぬ。是が”戦争”なのだ

「艦長、敵艦隊はかなり混乱してますね艦隊陣形がかなり崩れてます」

斎藤が報告をした

俺はコンソールのスイッチを入れて

「ご苦労、対空・対潜の警戒を厳重にな」

と声を吹きかけた

俺は対空レーダーに目をやり次の目標を決めていた。
康定級フリゲート級8、成功級フリゲート7、済陽級フリゲート8である

フェーズド・アレイ・レーダーが一回で攻撃と出来るのは12機

「艦長、康定級から攻撃を確認。本艦です」

やはりきたか……　だがやるべき事は一つ

「対空戦闘用意!!飛来するミサイルに備え!!」

俺が怒号すると速やかに対空戦闘に移された

「スタンダードですね？」

斎藤がこちらを見て問い掛けてきた

「よろしい。飛来するミサイルにターゲットマーク」

俺はそう答え目をそらした

「撃ち方用意～撃っ！！」

スタンダードが撃たれあっさりと飛来したミサイルを撃墜

次は反撃……纏めて片付けたほうが早いかな……

「兵器の管制を自動から手動へ変えるぞ」

斎藤は何故？という顔をした

「ハルマゲトン・モード（無差別飽和攻撃）用意」

「ハープーンを全て使い切るぞ……データを入力してくれ」

「砲雷長、いいんですね？」

斎藤が最後の確認を取ってきた

「ああ、苦渋の決断だがな……」

「よし、撃ち方用意〜」

手が震える、怖い。できればこんな事したくはなかった

でも是が俺の”意志”いいんだこれで

「待ってください！！」

斎藤が突然声を荒げた。それも尋常じゃなく

「敵艦隊反転！撤退していきます全艦です、攻撃中止を具申します！」

「何故だ！？」

ありえないどういうことだ？今なら攻撃が間に合う

「攻撃中止は認めない！撃ち方用意、確実に落せ！！」

「対空レーダーに感！戦闘機です！！」

「周波数は何処だ？」

このタイミングで戦闘機？航空機による大編隊攻撃か？

「べ、米軍です！米軍周波数を確認！沖縄嘉手納飛行場からの発進を

確認。現在機種を確認中」

馬鹿な、アメリカは無関係を主張したのに

「照合が完了！Ｆ－１４、トムキャットです」

「上からの打電です”撤退せよ”と……」

何故だ、何故だ？理不尽すぎる！！

「砲雷長！いいんですか？」

「ええいくそっ！命令は命令だ撤退するぞ、針路１－１－１両弦全速
取り舵一杯！！」

俺たちの戦争は国の間での会談で終わってしまうようなものだったのか？

海は何も答えてくれず艦はだだ波を切り裂いていた……

事件が終わってから2週間後俺と艦長は査問委員会に掛けられた

無許可攻撃、独断専行……艦長は陸の閑職に更迭、俺は補給科に飛ばされた

運命は俺と艦長を日本の動乱のステージから降りる事を許さなかった…

回想（後書き）

戦闘のシーンはあまり書きませんでした
じゃないとかなり掛かってしまうので（汗

次回からは会社を中心とした展開になります

批評・感想をくれると嬉しいです

重なる面影（前書き）

スイマセン！半年以上放置してしまいました……。次回からは頑張って更新をしていきたいと思います

重なる面影

「あちっ！」

暫く遠くをボンヤリと見つめながら時を過ごしていた瀧瀬は完全に煙草の存在を忘れていた

あの事件のあと乾ドックに入り、改めて艦内が地獄である事を認識した

当然のように俺は独断専行で中国海軍の艦を攻撃したとして補給科に飛ばされた

後から聞いた話だが、俺は内密に処理されていてもおかしくは無かったらしい

「瀧瀬さん……？」

クルッと後ろを振り向くと浅尾さんがいた。不思議そうな顔をしている

「どうした？浅尾さん」

かなり短くなっている煙草を携帯灰皿に押し付けながら聞いた

「もう……昼休み終わりますよ～」

時計を見るともう１２時５５分。　あと5分の間にオフィスに着かなければならない

「あぁ。ありがとう」

遅刻を救ってくれた浅尾さんにお礼を言って横を通り過ぎようとしたとき……

浅尾の香水の香りが瀧瀬の脳を支配した

「何故……」

恵子の香水とまったく同じ匂いがした。あの甘くてフワッとした匂い……

自分の理性が暴走する兆候が出てきた。浅尾さんがだんだん恵子に見えてくる

最近訓練もされていない瀧瀬にとって理性が暴走することを止める事ができなかった

「ひゃっ！瀧瀬さん……」

抱きしめたときに浅尾さんの首筋から匂う香りに俺は理性が完全に崩壊した

まるで貪る様に恵子が死んでからのフラストレーションを今、解消しようとしていた

もう会えない恵子の面影を重ねながら……

重なる面影（後書き）

批評・感想を頂けると嬉しいです

招かざる客（前書き）

恐ろしいほど更新が遅れてしまいました。申し訳ありません（泣）

招かざる客

「うぅ……瀧瀬さん……」

ポツリと細い声を振り絞って出した浅尾の言葉で瀧瀬は自我を取り戻した

「あぁ……すまない」

瀧瀬と浅尾は見詰め合ったまま動こうとしない

この間に耐え切れなくなった瀧瀬は、たまらなく屋上から逃げた

※

「くそっ！」

煮え切らない頭の中を瀧瀬はむりやり叱咤する

美雪はいない。もう二度と会えるはずがないとわかっていてもいまだ俺の頭は美雪を求めている

二課のオフィスに着くと課長が神妙な顔をしていた

「瀧瀬、お客さんだ……」

瀧瀬にはわからなかった。何故客人が来ただけでこんな神妙な顔

をするのか

「応接室に待ってもらっている。早く行きなさい」

「あ、はい」

釈然としない課長の行動に不信感を覚えながらも応接室へと歩を進める

ドアを二回軽くノックしてドアノブを回す

応接室のソファーに座っていた中年と見える男性は瀧瀬の顔をみて微笑し話し掛けてきた

「待っていましたよ。こんにちは」

みた事もない男性だった。身長は１７０センチ前後、ダークグレーのスーツを着ていた。

顔立ちは中年そのものだが、出している空気はとても中年男性のものとは思えなかった

そして目つき、物腰柔らかそうな雰囲気を全身に出しているが娑婆の目ではない

「私はこういうものです」

差し出してきた名刺を素早く見る。『保証生命』と書いてある

「保証生命……」

頭の中に一筋の光が走った。『保証生命』、地方公務員向けの生命保険会社で地方勤務の
警察官に斡旋される保険である。そのためこの会社の９０パーセントの契約は警察官であったはずだ

表向きは生命保険会社だが実は、歓楽街における外国マフィアと暴力団の銃器・麻薬取引の
現場に突入、逮捕・ブツの確保を任務としている特別機動捜査隊、通称「特機隊」のアジトで
ある。そのため会社の支社は歓楽街の近くに建てられている

北海道警察のように、警察庁監督下でも汚職が摘発されているのに暴力団との癒着がないと　　は言えないため、全都道府県警察に警視庁隷下のもと特機隊が設立された

最初に目つきで感じた疑念が確信へと変わっていった。

間違いない、コイツは警察庁（サッチョウ）の人間だ

「あんた……どこの畑の人間だ？」

※

名刺では吉田と名乗っている人間は右手を顎に乗せて動こうとしない

２課のオフィスの奥にある応接室はまるで時間が止まっているかのような静かさだった

顎に手を置いていた吉田は微笑を浮かべて言った

「畑ですか……なんのことやら」

「警察庁(サッチョウ)の手先が俺になんの用だ？」

話をはぐらされたのが気に食わなかったのか瀧瀬は語尾を荒げて言った

「おやおや、そんな熱くならなくても」

年の差か今回は瀧瀬のほうが分が悪い。完全に苛立った瀧瀬は無言のまま応接室から

出ようとした

「サッチョウですか……。どうやら市ヶ谷と横須賀には隠蔽は成功していたようだ」

「どういうことだ？」

ドアノブに手を掛けようとしたときだった。突然の意味深な言葉に瀧瀬は再びソファー

へと向った

「あれ？帰らないのですか？」

また微笑を浮かべながら嫌味を言ってくる吉田は無視して質問をする

「貴様……サッチョウではないのか？」

コホンと一つ咳払いをして吉田は言った

「ぼくらはジャガイモなんですよ」

「ジャガイモ？」

鸚鵡返しで聞いた瀧瀬の反応をあたりまえだという表情を見せながら吉田は饒舌な口調で言う

「そうです。僕らはずっと土の中で生活しているのです。外から見ればどうのように　　成長しているかもわからないし、大きさも同じわけではない。そして土地も取る」

「何を言いたい？」

再びイライラしてきている瀧瀬を無視して吉田は続ける

「やがて大きく育っていき頃合を見て収穫したとき、娑婆に引き戻されたとき、公安としての
人生は終わるのです」

「まさか……ハム（公安）？」

「その通り」

警視庁公安警察、国家の安全と秩序を守る陰日向の組織

いてもたってもいられなくなった瀧瀬はいきなり立ち上がり、さっき貰ったとく名刺をビリビリに破いた

「手帳を見せててくれ」
懐から出てきた警察手帳を見て、この吉田の言っている事が本当かわかった
階級は警部補だった
「あんたはハムの浸透員か？」
「その通り」
「私の正式な肩書きは警視庁公安部５課、特殊浸透員、吉田隆（よしだたかし）警部補です。
現在本官は、斎木警備企画課情報担当理事官の密命もと動いています」
公安警察は形としては警察庁に組み込まれているが、機能的には独立をしており
普通の警察とは任務の内容も違う
「それで、サッチョウに使えている公安さんが俺になんの用だ？」
「一ヶ月前、公安調査庁のエスから連絡が入った」
公安調査庁とは大きく纏めてしまえば公安警察と活動内容が同じだ。
一つの違いとすれば公安調査庁は逮捕権が無い
ちなみにエスとはスパイの英文字スペルの最初のエスをとっての

こと

「2週間後、指定暴力団神谷組と中国系マフィア殺華の間で大規模な取引が
行われるらしい」

先程の人の良さそうな顔つきと物腰は何処へ行ったのかその世界の住人としての厳しい
顔つきをしている

「偽装通貨や拳銃、麻薬のレベルでしょうね」

当然といえば当然で、暴力団レベルの取引と言えばその程度である

「いや違う」

「違う？」

青ざめた顔をしている吉田を見て何か嫌な予感がした

「一体何を取引するんですか……」

吉田は一度天を向いて一息ついて言った

「小核弾頭……」

※

瀧瀬は鈍器で思いっきり殴られた感覚に陥った
さらに目眩もしてきた。小核弾頭、それぐらいショックだった
「……何処ルートですか？」
自分でも顔が青ざめていく感覚がわかる
「露西亜、チェルノブイリルート。武器商、ロマコフ・セルゲイから殺華総統、謝華（シャカ）に
輸出。そして神谷組にだ」
チェルノブイリ、数年前に原発事故が発生。それからゴーストタウン化して、武器商売の
メッカとなっている
「神谷組はその小核弾頭を手にして何をするつもりですか？」
「今回、取引で輸入する数は１つと予想されている。打ち込むとしたら
何処にすると思う？」
簡単な質問のようにも取れるが難しい質問だ。一発で日本の中枢をシャットアウト
出来る場所は一つ
「霞ヶ関でしょうか？」
吉田は顔色一つ変えず言った

「ハズレだ」

「え？」

「では、一体何処です？」

吉田はふぅと一息ついてから厳しい顔つきで言った

「貴社だ」

吉田は間髪いれず続けていく

「この情報には間違いは無い。公安調査庁のエスからの情報もながら、公安部外事課が
全力をあげて情報のもとを取ったのだ」

「そして、君が所属していた組織の対外情報解析課からもね」

「何故、佐山建設が？」

「それは簡単に言えませんね」

「何故だ？」

「一つ条件を提示させてもらいます」

吉田の瞳がかすかに揺れた

「今回、警察庁は緊急事態として非合法の特殊部隊を創設する事が決まった。

防衛省の介入が入る前に処理をしたい」

そこでだと話に間を入れて瀧瀬の瞳を直視しながら続けた

「瀧瀬君、君にはその特殊部隊の実動隊の指揮官になってもらいたい」

招かざる客（後書き）

批評・感想を頂けると嬉しいです

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5135c/

記憶

2010年11月8日08時13分発行